



114
A 5120

第一行政裁判ノ沿革

明治五年司法省第四十六號達ヲ以テ地方官ニ
對シテ訴訟ヲ提起セント欲スル者ハ通常裁判
所ニ其訴狀ヲ差出サシメテ以テ之レカ裁判ヲ為
シタリシニ地方官ヲ相手取ル訴訟一時ニ増加シ
之レカ為ニ司法官ニ於テ行政官ヲ牽制スルノ弊
害百出シテ底止スル所ナキニ至レリ故ニ明治七年
司法省第二十四號達ヲ以テ始メテ行政裁判ノ名
稱ヲ附シテ自今地方官ヲ相手取ル訴訟司法
官ニ於テ之ヲ具狀シ太政官ニ申稟セシメタリ然
レトモ是レ姑ク一時ノ弊害ヲ救治スルニ過キスシテ
未タ別ニ行政裁判所ヲ構成スルノ時運ニ達セ



大正十一年一月
侯爵邸寄贈

三五二一五番許一五 東京市京橋區南銀座町九番地 十時許郵政協會

カリシナリ其後太政官ノ指令及司法省ノ達指令
ノ在ル有リテ漸ク之レカ慣例ヲ為シ郡區戸長ヲ
以テ被告トスル訴訟ハ始審裁判所ニ提起セシツ
府縣知事以上ヲ以テ被告トスル訴訟ハ控訴院ニ
提起セシメタリ而シテ當該裁判所ハ其訴訟ヲ受
理スヘキヤ否ニ付先ツ之ヲ司法省ニ具状シ司法
省ハ之ニ意見ヲ付シ閣議ニ呈出シテ内閣ノ
裁定ヲ請ハシメタリ又其之ヲ受理スヘシトノ裁
定ヲ經タルモノニ付テハ更ニ同一ノ手續ヲ經テ之
レカ判決ヲ為スヘキヲ以テ受理判決皆内閣ノ裁
定ニ歸セリ加之ナラス二十二年六月四日法律第十
六號ヲ以テ市制町村制ニ依リ當分ノ内閣ニ於
テ行フヘキ行政裁判ハ現行ノ行政裁判手續ニ從

三五二一五號野一五 東京市京橋區南船場町九番地 十 野村胡堂

七 控訴院ニ於テ受理審問セシメ内閣ノ裁定ヲ經
テ判決ヲ言渡サシムト定メタリ然ルニ又明治二十
三年六月二十八日ヲ以テ行政裁判法ヲ發布シ其
施行期日ヲ以テ同年十月一日トナシタリ其茲ニ至
リタル所以ノモノハ現行行政裁判手續ハ一定ノ法
律ヲ以テ規定シタルモノニ非ス而シテ又行政裁判
所ノ組織及權限ヲ明晰ナラシメ且裁判手續ヲ
嚴密ナラシムル等大ニ改良スヘキノ必要アルカ為
ノミナラス憲法第六十一條ニ行政官廳ノ違法處
分ニ由リ權利ヲ傷害セラレタリトスルノ訴訟ニシテ
別ニ法律ヲ以テ定メタル行政裁判所ノ裁判ニ屬
スヘキモノハ司法裁判所ニ於テ受理スルノ限ニ在ラ
ストシ且市制町村制郡制府縣制等ニ於テモ行政

行政裁判所

裁判所ニ出訴スルヲ得ル場合ヲ規定シタルモノアルニ由ルナルヘシ

第二 現行行政裁判所ノ組織

行政裁判所ノ組織ニ字國ノ如ク始審控訴上告ノ等級ヲ設クス專ラ我慣例ニ基ツキ傍ラ墺國ノ法ヲ參酌シテ東京ニ一個ノ行政裁判所ヲ置ケリ其裁判官ハ三十歳以上ニシテ五年以上高等行政官ノ職ヲ奉シタル者若クハ裁判官ノ職ヲ奉シタル者ヲ以テ内閣總理大臣ノ上奏ニ依リテ之ヲ任命ス其裁判ヲ為スニ當ラハ必ス五名以上ノ列席合議ヲ要スルモノトス而シテ裁判官中多クハ專務ナルヘシト雖亦各省若クハ通常裁判所ヨリ兼務スル者ナキニ非ス裁判ノ公平ヲ保タシメンカ為ニハ裁判所

構成法第七十三條ノ例ニ準シテ裁判官ハ刑事裁判所ノ裁判又ハ懲戒裁判所ノ裁判ニ由ルニ非サレハ其意ニ反シテ退官轉官又ハ非職ヲ命セラル、コトナカラシメ又同法第七十二條ノ例ニ倣ヒ在職中裁判官ノ政黨ニ加ハリ政談ニ關スル演說ヲ為シ新聞紙等ニ政事上ノ議論ヲ掲載シ諸議會ノ會員(貴族院議員ヲ除外ス)トナリ他ノ官ヨリ兼務スル者ヲ除ク外金錢上ノ利益ヲ得ル職ニ就キ高業ヲ營ムコトヲ禁シタルノミナラス市制第四十三條町村制第四十五條ノ例ニ準シテ裁判官ノ縁者ニ利害ノ影響者ヲ及ホスヘキ場合及曾テ官吏又ハ一人ノ資格ヲ以テ裁判スヘキ事件ニ關係シタル場合ニ於テハ其評議及議決ニ加ハルコトヲモ禁シ

タリ

第三 現行行政裁判所ノ權限

行政裁判所ノ權限ヲ規定スルニ列記法ト概括法
ノ二様アルコトハ既ニ各國ノ現狀ニ徴シテ明カナリ
我行政裁判法ハ第十五條ニ於テ列記法ヲ取リ
而シテ現時法律勅令ニ於テ行政訴訟ヲ許シタルモ
ノハ市制、町村制、郡制、府縣制、水利組合條例、官
吏恩給法、官吏遺族扶助法、軍人恩給法、鑛業條
例、小學校令、明治二十三年法律第百六號、府縣立
師範學校及公立中學校ノ學校長正教員並市
町村立小學校正教員ノ退隱料又ハ遺族扶助料ニ
關スル件、砂鑛採取法、河川法、沖繩縣區制、砂防
法、森林法、北海道國有未開地處分法、北海道區

制町村制、郡制ヲ施行セサル島嶼ヨリ選出スヘキ府
縣會議員ノ選舉ニ關スル件ニ過キサルナリ此ノ如
ク我行政裁判法ハ權限規定ノ點ニ於テハ墺國法ニ
及シテ列記主義ヲ取リタルニ拘ラス凡ソ行政訴訟ヲ
提起セントスル者ハ先ツ地方上級行政廳ニ訴願シ
テ其裁決ヲ經サルヘカラストスルノ點ニ於テハ概テ墺
國法ノ主義ヲ取レリ然レモ各省又ハ內閣ニ訴願ヲ
為シタル者ハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得サラシムル
モノハ市制町村制郡制府縣制等ノ主義ト權衡上
其宜シキヲ保タシメタルモノナルヘシ

第四 行政裁判所ノ權限ヲ規定スルニ概括法

ト列記法ノ兩様アリ

我カ國行政裁判法第十五條ノ所謂法律勅令ニ於テ

行政訴訟ヲ許シタルモノ今日ニ在テハ其ノ數實ニ僅少ナリ後來ノ進步發達ヲ計ル為メハ現行列記ノ主義ヲ變シテ概括ノ主義ニ更メサルヘカラサルカ是レ大ニ講究ヲ要スヘキ問題ナリ

行政裁判所ノ權限ヲ規定スルニ概括法ト列記法トノ二種アリ各々長所ト短所ヲ有シ一朝一夕ニ其利害得失ヲ判定スルコト極メテ難シトス今試ニ兩者ノ長所短所ヲ舉クルハ概略左ノ如クナラシカ

概括法ノ長所、此法ニ依リハ主義上行政訴訟ニ適當スヘキ事件ニ付テハ悉ク出訴ニ得ヘク列記法ニ於ケル如ク一々訴訟事件ヲ列記スルノ煩ナシ

其短所、此原則ヲ實際ニ適用スルニ當リ官民共ニ其訴訟ノ適否ヲ判別スルニ苦シミ又行政官ハ

其處分ニ對シ出訴セラル、ノ煩ニ堪ヘス從テ行政機關ノ敏捷ナル活動ハ為ニ沮碍セララル、ニ至ル

列記法ノ長所、各行政法ニ訴訟事件ヲ明揭スルヲ以テ其事件ヲ一目瞭然ニ判知スルヲ得ヘク從テ濫訴弊ヲ防クノ一良法タルヘシ

其短所、訴訟事件ヲ列記スルニ當テハ主義上行政訴訟ニ適當セサルモノヲモ列記スルノ誤ナシトセス加之ナラス如何ニ其列記ニ注意シテ脱漏ナカラシメント務ムルモ時ニ或ハ誤脱アルヲ免カレス

既ニ行政裁判所ヲ設立シタル各國ニ於テ何レノ方法ニ依リ訴訟事件ヲ規定シタルヤヲ略述センニ

英國、白國ノ如キハ別ニ行政裁判所ヲ設立セズ
行政訴訟タルヘキモノハ併セテ通常裁判所ノ權
限ニ屬セシム而シテ其不可ナル所以ハ今茲ニ喋々ス
ルヲ要セズ所說既ニ一定スト謂フモ過言ニ非ナ
ルナリ

佛國、行政官ノ越權處分ニ對スル訴訟ト獨逸
法ニ於テハ通常裁判所ノ權限ニ屬セシムタル國
庫訴訟ヲ除ク外概テ獨逸行政裁判所ノ權限
ニ同シク列記法ヲ取レリ

埃國、概括法ヲ取ルト雖數多ノ除外例アリ而
シテ其中最モ範圍ノ廣大ナルモノハ行政官ノ
認定處分ニ屬スヘキ事件是ナリ
獨逸各邦、亭國、巴威爾、巴典等ニ於テハ行政

裁判所ノ權限ニ廣狹ノ別アリト雖何レモ列記
法ヲ取ラサルハナシ獨リ瓦敦堡ニ於テ概括法ヲ
取ルノミ然レトモ埃國ニ均シク行政官ノ認定處
分ヲ以テ除外例ノ一トセリ

上陳各國ノ例ニ徵シテ考フルトキハ其列記法ヲ取ル
モノ多キニ居ルノミナラス概括法ヲ取ル國ニ於テモ必
スヤ行政官ノ認定處分ヲ除外セサルハナシ然ルニ漠
然タル概括法ヲ取ルニ於テハ現行法中行政官ノ認
定處分ニ任シタル事件ニ付テモ行政訴訟ヲ許スニ
至リ其弊ヤ行政ノ活動ヲ萎靡セシメ大ニ其發達
ヲ妨害スルノ慮ナシトセズ新聞紙法出版法集會及
政社法等ニ於テ行政官ノ認定ニ一任シタル彼ノ安
寧秩序ノ妨害風俗壞亂ニ因レル出版物ノ發賣

頒布ノ禁止、集會結社ノ禁止ノ如キ處分ハ最モ
顯著ナル一例ナリ

又概括法ハ通常裁判所ノ権限内ニ侵入シ其職
權ヲ奪取スルノ弊ヲ生スルノ虞アリ裁判所構成法第
二條ニ依レハ通常裁判所ハ民事、刑事ヲ裁判ス
ニヤトアリ其性質ニ於テ民事ニ屬スヘキモノ之ヲ換
言スレハ訴訟事件ニシテ民法ノ規定ニ依リ判斷ス
ヘキモノハ通常裁判所ノ権限ニ屬スヘキヤ甚タ明
ナリ加之ナラス現行列記ノ主義タルヤ行政官ノ違
法處分ニ基因スル事件ト雖其性質上民事ニ屬
スヘキモノハ通常裁判所ノ裁判ニ任スヘク行政裁判
所ノ権限ニ屬セシメサルコトヲ豫期シタルモノナルヘシ
然ルニ概括法ヲ取り凡ソ行政官廳ノ違法處分ニ

由リ權利ヲ傷害セラレタリトスル者ヲシテ漠然ト行
政裁判所ニ出訴スルコトヲ得セシメハ訴訟事件ノ
性質上民事ニ屬スヘキモノト雖行政處分ニ基因ス
ルノ故ヲ以テ行政裁判所ノ裁判ヲ受クルニ至リ帝
ニ行政裁判法ノ主旨ニ背反スルノミナラス裁判所構
成法ノ明文ニ牴觸ス支レ此ノ如ク法律ノ牴觸ニ拘
ラス猶且概括法ニ更ノレトスル如キハ重大ナル理由アリ
テ存セサルヘカラサルナリ茲ニ一例ヲ舉ケテ其然ル所以
ヲ證センニ行政官ハ或ル工事請負ヲ契約シタル場
合ニ於テ請負人ニ對シテ其契約ニ背キタル處分ヲ
為シタルニ因リ不服アリトセンカ元來此處分ハ行政
官カ為シタルニ拘ラス其當否ハ即チ民法ニ依テ判
斷セサルヘカラサルヲ以テ請負人ハ民事トシテ之ヲ通

常裁判所ニ出訴シテ其當否ノ判断ヲ請求スルハ裁判所構成法ノ規定ニ依テ固ヨリ當サニ然ルキ所ナリ然ルニ漠然タル概括法ニ依リ其性質ヲ區別セシテ廣ク違法處分ノ行政訴訟ヲ許ストキハ請負人ハ行政裁判所ニ出訴セサルヘカラスラ以テ構成法ノ主義ニ為ニ破壊セラル、ニ至ルヘシ上陳ノ論者果シテ其當ヲ得タルモノトセハ我國行政裁判ノ進歩ハ概括法ニ望ムヘカラスシテ現行列記ノ主義ヲ發達セシムルニ在ルヲ以テ後來各種ノ行政法ヲ發スルニ當リ行政訴訟ヲ許スヘキモノヲ一々其法律ニ列記スルコトニ注意セサル可カラサルナリ之ヲ要スルニ概括法ト云ヒ列記法ト云フハ單ニ法律ノ成文ニ現ハル、名稱ノ差別ニ過キサルナリ抑

行政訴訟ハ憲法ニ謂エル如ク行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セラレタリトスルノ訴訟タルコト一定不動ノ原則ナル以上ハ名稱ノ如何ニ拘ラズ其實質ニ於テ既ニ整然タル領域ヲ有スルモノナリト云ハサルヘカラス果シテ然ラハ之ヲ審判スル上ニ於テモ名稱ノ差ニ依テ毫モ異ナルコトナキヤ知ルヘキナリ

第五 憲法第六十一條ノ解釋

理論上ヨリ司法ト云フトキハ然テ獨立官衙ニ於テ裁判ヲ為スラ意味ス故ニ司法中ニ行政裁判ヲ包括スト雖憲法第五章ニ所謂司法中ニ行政裁判ヲ含蓄セス然リ而シテ第六十一條ノ成文ハ行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セ

ラレタリトスルノ訴訟ハ別ニ法律ヲ以テ定メタル
行政裁判所ノ裁判ニ屬スヘキモノニシテ司法裁
判所ニ於テ受理スルノ限ニ在ラストノ旨意ニ外
ナラサルヘシ蓋其意義ハ憲法義解ニ依ルモ明
ニシテ即チ第一司法權ハ行政權ヨリ侵害ヲ受
クヘカラサル如ク行政權亦司法權ノ侵害ヲ受ク
ヘカラス第二普通裁判官ニ對シテ民事刑事
ノ法律ニ精通スル如ク行政法ノ熟達ヲ望ムハ
不能ノ事タルノミナラス事務繁劇ノ為メ裁判
及テ疎漏ニ流シ彼ノ分業主義ニ悖ルモノ在リ
ト云フニアラン

三五二五 東京市京橋區南町九番地 十 行政裁判所

モノハ司法裁判所ニ於テ受理審判スヘシトスルモ
裁判所構成法ニ通常裁判所ハ民事刑事ヲ
裁判スト在リテ明ニ其權限ヲ規定スルヲ以テ
明文上之ヲ許サルナリ故ニ凡ソ實質上行政訴
訟タルヘキモノヲ裁判セシメントセハ構成法ニ改
正ヲ加ヘサルヘカラス果シテ然ラハ其性質ニ於テ
行政裁判所ノ權限ニ屬スヘキモノヲ通常裁判
所ノ權限ニ追加スルヨリモ行政裁判權限法ヲ改
正シテ其權限ヲ擴張シ以テ正當ノ途ニ歸セシムル
ノ勝レルニ若カス

第六 今ヤ行政裁判權限法ヲ規定スルニ當

リ概括列記孰レノ方法ヲ採ルヘキヤ

明治二十三年行政裁判法發布以前ハ稍々概括

法ニ近キ制度ナリシモ行政裁判法其他近時ノ
行政法ハ明ニ列記ノ方法ヲ採用セリ而カモ第五
段ニ於テ論述セシ主旨果シテ真正ナリセハ益々
従来ノ立法体裁ヲ變更セサルヲ可ナリトスヘキ
ハ信シテ疑ハサル所ナリ又他ノ方面ヨリ觀察シ
概括法ハ一見民権ヲ擴張スル如クナルモ其實大
ニ然ラサルモノアリ人アリ或ル利益問題ヲ以テ行
政訴訟ヲ提起シタリトセン乎裁判所ハ自個ノ
権限ヲ裁定スル権アルカ故ニ憲法及行政裁判
権限法ニ照シテ該事件ヲ審査スルトキハ直ニ
其権限外ナルヲ知り受理スヘカラサルニ終ラシ
然ルトキハ人民ハ無益ノ訴訟ヲ提起シ無用ノ
費用ヲ負擔スルニ至リ官民共ニ何等ノ効益ヲ

三五、二五、四野一五 東京市裁判所裁判官九番地 十、中野区裁判所

見サルノ結果ヲ生スルノミ

行政裁判所

